

ブルアカうんち小説誌

り
か
い
で
き
な
い
も
の
お便秘と腹下しを通じて

優しさの理解を得る



18禁
成人向け

リかいてきないもの
お便秘と腹下しを通じて優しさの理解を得る
目次

- 1. 流転なき七日分の成果**04
 キャラクター：古関ウイ & 若葉ヒナタ
- 2. 間違った末に**28
 キャラクター：伊草ハルカ
- 3. その美食は尊厳を賭してでも？**40
 キャラクター：黒館ハルナ & 愛清フウカ
- あとがき (AJ)**56
あとがき (オレオン z)59
奥付60

小説 : AJ
 表紙・挿絵イラスト : オレオン z

流転なき七日分の成果

トリニティ総合学園の古書館。到底数え切れない膨大な量の古文書や、遺物の域に達する希少書が眠るその場所に古関^{コゼキ}ウイという少女は居る。その蔵書のみならず建物自体が歴史的価値を持ち、古風で、厳肅で、そして時に人々の忘却の彼方へと追いやられるその場所で、ウイは日夜難解な古書の解説や管理に励み、そして寢食すらそこで済ませている。そこに「居る」という表現は相応しくなく、「引きこもっている」と評する方が適切だ。「古書館の魔術師」と称されるほどの誰よりも深い古書の扱いに関する知識と能力を評価され、図書委員長のポストに就いている彼女であったが、配下の図書委員ですら数週間姿を見ないことが珍しくはない。

どれだけ高度な古文書を読みこなせても、言葉を詰まらずに人と話すことがウイにはできなかった。バラバラになった古代の経典を復元することができて、ウイにとつて他の生徒と交流を深めることは難しい。そこに思うところもあつたが、さりとて何か行動を起こす勇氣と気力があるわけでもなく、少女は今日も愛情を注ぐ本の山に埋もれるばかりだった。

* * *

(やっと終わった……これで「この子」も、もしかしたら、誰かに出会えるかも、しれません……)

机の上に載せられた辞書ほどの厚さのある古文書と向き合っている

たウイは、実に数時間ぶりに肩の力を抜き、椅子の背もたれに預けたその身を脱力させた。

最後にウイが古書館の外に出たのはいつだろうか。本人の記憶すら曖昧であつた。ここ数日は分厚い古書丸々一冊の解説に打ち込んでおり、外出どころか食事や睡眠すらおろそかにするほどのだから。

見れば膝にまで達する長い黒髪からは艶が失われ、白を基調とするセーラー服も、羽織ったベージュのカーディガンもいつも以上に皺が目立っていた。端正ながら醒めた表情ばかりを浮かべる相貌は平素と変わらないが、常に刻まれている目の下の隈は、一層その深さを増している。そんな姿だけでも、華奢なその体に秘められた集中力と熱意が——あるいは尖った能力ゆえの不器用が理解できた。

(あつ……そういえば、もうシャワーを、三日も浴びていないです。うう、さすがに汗を流さないと、ま、ま、まずいかも)

言葉無き声に耳を傾ける情熱と愛情も過ぎれば毒だろう。清潔かつ清純であるべき十代の女子生徒が、まさか三日の間、シャワーも浴びず着替えすら失念しているのだから。かつて、図書委員^{トクシ}がとて言いつらそうに指摘してきた言葉がウイの脳裏をよぎる。

『ウイ委員長……その、最後にお風呂に入った日は、覚えてますか』
六日もの間一度も着替えていなかったのは、さすがにやり過ぎたと今でも思っている。自身の体臭には気が付かないものだ。まだ三日目に過ぎない今でも、嗅覚の鋭い者ならば、少女の甘い香りに混入した、汗や脂に由来する酸味の効いた臭いを感じ取るかもしれない。

(滅多に人は来ませんが、先生が急に來るなどと言いつつ前に、浴びておきましょう……はあ、溜まったゴミも片付けないと……)

作業が一段落して集中がほぐれると、途端にやるべきことが浮かぶものだった。着替えと入浴はもちろん、大切な女子たちの居場所である机や書棚以外は散らかり放題の部屋も少しは片付ける必要があるだろう。図書委員長としての仕事もしばらく保留にしているものが多い。

たくさんのタスクがウイの思考の中に現れ駆け巡るが彼女は動かない。ゆっくりとソファで寝ていたという欲求があった。しかしそれ以上に少女の思考をかき乱すのは、見てみないふりをし続け、しかし落ち着いたがゆえに意識せざるを得なくなった体の重さと、内側から臓物を強く締め付けられる不快である。

「はぁあ……………」

ウイは座したまま下腹を右手で擦り、深くため息をついた。

(えっと、最後に出せたのは、多分七日前でしょうか……かなり、溜まってしまっています……)

豊満さを欠いた乳房のずつと下。あばら骨の下端とみぞおちを超え、腸管の収まったその場所に、もう一つの膨らみがあった。服の上から識別できはしなくとも、触れた手の感覚は、その体に描かれた異質な曲線を捉えている。そこに眠るものの硬さも、質量も、穢れも、ウイは認知せねばならなかった。

(うんこ、いい加減出さないと……ううう、意識をすると急にお腹が痛くなってきました。気持ちが悪いく、体が重たいです……)

大便が出ない——不調の正体はなんとも情け無いものだった。

しかし、たかが便秘と侮ることもできない。実に七日もの間、ウイは排便ができていないのだから。吐き出せずにひたすら積もり続けた日々の消化の産物は、過剰に水分を吸収され、岩石のごとく硬化し、

そのか細い体の内にぎっしりと詰まっていた。それだけ大量の便を溜め込むだけの余剰空間があるはずもなく、巨大な塊は腸壁を無理矢理押し拡げ、周囲の器官を圧迫しながらそこに存在している。体の重さも気分の悪さも当然のこと。むしろ、作業への集中力で、今日ここに至るまで不調を意識の外に置いていたことが不思議なほどだ

(毎日すんなり出てくれればいいのですが、ままならないものです)

ウイはいつも便秘がちであった。古書館に引きこもる毎日がゆえに運動不足は明らかで、睡眠もひどく不規則。食事についても、栄養バランスに気を払っているとはお世辞にも言い難い。加えて、せっかくな便意を催しても、読書に集中していると排泄すら後回しにすることがしばしばあった。便通が滞るのも当然の帰結であろう。

(……ど、どうせ誰も居ないですし、ここで)

「んっ……」

ぶすぶすぶすっ、ぶすうううー、ぶび、ぶすすすっ

椅子に座したまま尻の片側を浮かせ、ウイは静かに放屁をした。大腸を満たしたガスが空間に拡散していく。老廃物を詰め込み、腐敗菌が優勢となった最悪の腸内環境が産み出す悪臭は、筆舌に尽くしがたい。ウイ自身ですら、鼻腔の刺激に耐えられず顔をしかめるほどだ。

ぶっ、ぶしゅしゅしゅぶすすすっ!

そんな最低をぶすぶすと吐き出しながら、ウイは仮初めの排泄がもたらすささやかな快に揺れる……それで、少しばかりお腹に弾みが付きました。

(あつ、だめっ、止めないとっ……!)

——ブピッ、ブウウーッ!!

(つ、お、音が……い、いくら人が居ないとはいえ、音が響く古書館でこんなことを、つ、いつもは私が静かにと言う立場なのに)

抗いようがなく、抑えようがなく、空気を震わせてしまったウイの「行為」は、静粛の空間によく響き渡った。

ここは古書館。訪れる者へウイは常に静粛を要求し、事と次第によつては、消音器内蔵の愛銃から放たれる「FACD——亜音速弾」でもって強制的に沈黙させるわけだが、今ここで下卑な騒音を撒き散らしたのは紛れもなく図書委員長のウイであった。あまり頻繁に人が来る場所ではないとはいえ、解説作業中に数え切れないほど行ったガス抜きも慎ましやかに済ませてきたが、膨らんで止まぬ腹腔の猛圧は、もはや音消しすら許してくれないようだ。

ぐるる……きゆるる……ぐろう

(あつ、今ので少しだけ、動いてきたかも、しれませんが……出せるかは分かりませんが、行って見ないと……)

そして、ガスの排泄に呼応した大腸の蠕動がウイを突き動かす。重度の便秘ゆえに過度の期待はしていなかったが、たとえ望みが薄くとも、この貴重な機会には絶るしかない。

たくさんの古書の収められた部屋を出て廊下へ。ほんの少し歩けば、すぐに目的の場所に辿り着けた。歴史ある建物とはいえ、必要な設備の修繕は適宜行われており、このトイレに至つては、建物の古風な雰囲気とはうってかわつて、乾式床や自動水洗の手洗い器を備えた近代的な作りになっている。ウイは迷わずいつも履いている室内用スリッパをトイレ用のそれへと履き替え、個室のある方へと歩み寄った。利用者がそう多くないことから、個室はたったの二つだけ。そのうちの

奥の一つが彼女の指定席だ。

ここは他の図書委員や清掃業者の手が入っているのか、少女を出迎える洋式の便器に目立った汚れはない。ゆえにウイは安心してそこへやや小ぶりの尻を向け、純白のロングスカートをたくし上げ、野暮つたい灰色の下着を降ろしながら便座へと腰掛けた。

そうして顔面と同じく不健全なまでに白い太ももと臀部が晒される。十七を数える年齢の割にはやや控えめな陰毛も、それでは隠しきれなかった陰裂も、そして赤黒い菊門も露わになっている……ウイはこれから大便をする。腹の中の汚穢をひり出すためにここを訪れ、便器に排泄孔を向けている。ウイ自身の準備は整った。それでは、ままならない彼女の消化器官はどうか。

「……っん、んんっ！ ぐんろう……っ！」

息む。踏ん張る。気張る——全身を強張らせ、唇を引き結び、膝の上に乗った両手が握り拳を作る。上体は便秘解消に効果的と書物で読んだ前傾姿勢。そうやって、便塊で膨らむ腹にウイは全力を込めて蠕動を促すが、芳しい反応は無い。皺の集まりであった肛門も大きく膨らみ開かれたものの、出すべき茶色は欠片たりとも現れず、ただそこは暗い穴蔵のままであった。

(うんこ出てっ、お願いですから……っ！)

張り詰め痛みを寄越してくる下腹を腸の形に沿つてなぞる……それで催してくれるのならば苦勞はしない。めくり上げた上着の隙間から覗くお腹に、歪な膨らみが現れるほどだというのに、圧迫感と重みで苦しくなるほど糞便を溜め込んでいるというのに、その大小腸はウイの切なる祈りを拒絶する。

「ふっ……ん、んっ、はぁぁ……んうっ」

ブッ！ ブビィィィ！ ブスッ！ ブウウウッ！！

そして、何度やっても吐き出せるのは汚物から無限に産生される腐敗の気体だけ。穢れた音色と激臭がウイの籠もる個室を支配していた。

（うう、おならが酷い……外の方など来ないといひのですが……）

人嫌いが激しく、常に壁を作り、触れられることを拒む少女にとっては、絶対に他者に知られたくはない事実であろう——まさか大便が出せず一人孤独に苦しんでいるなどは。人の目など気に掛けていないようで、その実ウイの心は繊細で此細なことで揺れ動くのだから。

「ん、んんんっ……はぁ、はぁっ……んんうううっ」

ぶすっ、ぶすぶすぶすっ……！ ブビィィィッ！！

悪臭を指摘され侮蔑される未来を想像し、感情をかき乱されながらもウイは頑張った。濃厚な腐臭に混ざる微かな汗の匂いがその努力の証である。

（お腹が動いてます……っ！ うんこ、うんこ出せるっ……！）

日の光から隠れて生きる証である白磁の頬。そこに至るまで血が上り赤く染まる。踏ん張る度に差し込む腹痛に耐えながら、何度も何度も息継ぎを繰り返して、乏しい体力を振り絞って数分間……ようやく彼女は大腸の蠕動を感じ始めていた。

「はぁぁぁ……はぁぁぁ……うあ」

肩を上下させて上がった息を整え、汗で額に張り付く前髪をかき上げる。休憩を挟みながらも幾度となく挑む。この糞詰まりの解消に、ウイはもう必死だった。

（お、降りてきました、出そう……っ、もうちよっと、ですから……）

「ふううう……んんんんっ、んっ、だんっ！」

ブボツ！！ ブビビブボボボツ！！

息遣いも、爆発的な放屁も、抑えることなどできはしない。膨大な知識の詰まった脳髓も、今はうんこを出すことしか考えられない。

「ふん、ん、んっ、んんんっ……んんっ！！」

動き出したかちかちの塊が直腸を強く圧しながら進んでいく。鈍重で緩慢な速度で光を目指すものがある。それをウイも理解しているから、決して逃すまいと全力を投じていた。

ブスブスブスッ！ ブブウウウッ——ミヂ！！

腹の中の異物感が肛門にまで達する。水分を搾り取られ枯れ果てた硬質便が、排泄のための穴を内側から押し広げて、姿を現そうとしている。待ち望んだ瞬間の、はずだった——

みぢぢっ……ぼちゃんっ……

——だがウイが出せたのは七日間溜め込んだ汚物のほんの一片。腹痛と吐き気にも負けず、懸命に踏ん張り続けたというのに、その成果は路端の小石程度の大きさの便塊だけであった。

（たった、これだけ……そんなわけ、ないですよね……うんこ、全部出したいのに……っ！）

「んんんんんんっ！ ふんっ、ぐんんんんっ……！！」

疲労困憊の表情を浮かべながらも、諦めきれないと言わんばかりに力を込める。

ブビィィ……ブブウウウッ……ッ！！

「ふううう……くっ、はっ、はぁぁっ、はぁぁ……もう、なんでっ」
しかし出すべき茶色は現れず、依然として下腹は醜く膨れたまま。

極度に硬質化して蛇腹の管を詰まらせる便塊は、もう微動だにしてくれなかつた。

疲弊し、押し寄せる徒勞感に吞まれたウイは便器に座したまうなだれるしかない。そして、垂れる前髪の奥に覗く瞳が、力なく閉ざされる……少女の諦観を物語るかのように。

(出ない、ですね……こんなにも溜まってしまっているのに)

下腹を撫でる右手が硬い何かに押し返される。大量の便秘便が溜め込まれているのが嫌でも分かる。けれど、自力ではどうすることもできない。偶然的解消に至るまで絶大な苦痛に悶え続けるか、あるいは薬の力に頼り辛酸を舐めるかの二つに一つ。それは経験上、彼女自身がよく理解していた。

このままであれば八日、九日、そして十日と便塊は重みを増していくだろう。食欲不振が極まり僅かに摂った食事をも吐き戻し、内臓の圧迫感と鈍重なる痛みに睡眠もともに取れず、汗と涙にまみれながら幾度となく排便を試みる地獄が待っている。その果てに排便ができたとしても、疲れ果てた体で詰まった便器の処理を強いられ、そして数日はすり切れた肛門の寄越すひりつく痛みを味わうこととなる。

他方、便秘薬の類いに頼ることも容易ではない。まず半端な効き目の薬では、奥にある便だけが緩み駆け下ることとなる。すなわちそれは、激しい腹痛に見舞われながらも、栓と化した便を出すのに長時間努力をしなければならぬということだ。便秘と下痢の二重奏は、慣れた彼女にとってもおぞましい苦痛である。それゆえ、トリニティ総合学園に古くから伝えられる極めて強力な下剤も、ウイは用いたことがあるが——壮絶な下痢で丸一日トイレと自室の往復を強いられ二

度と使わないと誓った。その際に数枚の下着を駄目にしてしまった事実は、彼女自身だけの秘密である。

そして洗腸という手段もあろうが、尻穴に異物を挿入する絶大な違和感と、腸管をグリセリン溶液にかき回される不快を受け入れることがどうにもできず、それも彼女にとっては最終手段であった。

まさに八方塞がり。どうであれ痛みを伴う結果が待っている。それを誰よりも知るウイは、ひどく憂鬱な表情で尻を拭いた。続く水洗の音は、僅かな汚れを落とすための紙と、情けない「成果」を流すためだけにむなしく響く。

(なんとか今日のうちに出せないともっと酷くなってしまうのに……薬や洗腸は使いたくないですし、それに買いに行くのに外に出ないといけないですし……)

たつぷりとガスを吐き出しても、依然として張り詰め、痛みが尾を引く下腹を撫でながら、ウイは元の場所へと戻る。此度も大便を出せなかつたという現実から逃避するため、とにかく今は書物の世界に閉じこもりたかつた。

……そうして覇氣無く俯き歩かせいで、彼女は背後から近づく来訪者の存在に、すぐに気が付くことができなかつた。

「あっ、ウイさんお久しぶりです!」

この古書館には珍しい明るい明らかな声が響き、そしてウイの肩が跳ねる。「ひやああっ!」

状況を理解するよりも早く、ウイは少女らしからぬ頓狂な声を上げていた。驚きの表情を浮かべ振り返ると、そこには黒を基調とした修道服に身を包んだ少女が、無邪気な笑みを浮かべて立っている。

「えあつ、ひ、ヒナタ、さん、でしたか……きゅ、急に後ろから来られたら、その、驚きますから……」

その衣はトリニティ総合学園の中でも最も由緒ある部活の一つである「シスターフッド」の所属を意味していた。その人嫌いゆえに、図書委員以外で交流のある生徒はほとんど居ないウイであったが、その生徒のことはよく知っている——とあるきつかけから、時折この古書館を訪れるようになった、若葉ヒナタという少女であった。

* * *

「……なるほど。つまり、シスターフッドで行う古式を再現した典礼のために、参考になりそうな子を探しに来た。そういうことですね」
ひとしきりヒナタから来訪の理由を聞いたウイが、難解な内容ゆえにうまく整理のできなかった言葉の主の代わりに、状況を一言でまとめてみせた。

「そ、そうです、そうなんですよっ！ ウイさん、今回もどうかお願いできないでしょうか。ウイさんなら、どんな子が適任か分かりますよねっ」

いつもドタバタなシスターが、困り顔を浮かべ上目遣いで訴え掛けられている。

「……何度も言いますが、まずここではあまり大きな声は出さないでください。その、なんといいいますか、確かにこの手のことなら、古い記録を探すのが最善ですが……でも、なぜヒナタさんが？」

貴方は古代語を読めないのに何故このような仕事を、などとはコ

ミュニケーション能力に難のあるウイもさすがに口にはしなかった。

「わ、私の担当は聖堂の物品管理ですが、でも、同じシスターが典礼の解釈のことで悩んでいて、その、放っておけなくて、ウイさんの居る古書館に来れば、きつと解決できると思っただけです」

ヒナタらしい理由だとウイは思った。そそっかしく、おっちょこちよいという言葉がよく似合う少女であったが、しかし他者を慈しみ、誰かの役に立とうと願う気持ちは人一倍強かった。そのひたむきさと、優しさはよく知っている。

「あつ、ウイさんのご都合も考えず……た、度々すみません。私自身がこの件で何かの役に立つわけでもないのに……」

知ってはいても、理解が及んでいるかは分からない……きつと理解はできていない。ある事件がきつかけで出会って以来、何かにつけて古書館を訪れるヒナタを見ると、自身の偏屈が浮き彫りにされるかのような感情を抱いてしまうウイなのだから。不器用なりに、誰かのために一生懸命な少女に触れると、自身に欠けた何かを突きつけられるようで、心のざわめきが加速する。古書館で本に囲まれて過ごすことを幸福と定め、他者との交わりを拒むウイは日陰者。ヒナタのようにはなれない。

けれど、ウイはヒナタを拒絶することはなかった。天真爛漫なこの少女を、がさつな他の外の人と同じものと見なすのは、良心が咎めることだろう。そもそも、本の一冊一冊を大切な友人であるかのように呼んでしまう自身に、何ら偏見を持たず、その想いを尊重して呼び方を合わせてくるほどのお人好しを、どうして嫌いになれようか。

それに、目まぐるしく移ろうその表情を、曇りなき満面の笑みを、

見ていると楽しくないと言えれば嘘になる。気まぐれに嗜好にあつた本を見つけて紹介してやると、決まって感想を伝えに来てくれるのがとても嬉しかった。自他共に内心への理解が苦手なウイに自覚は無いのかもしれないが、ヒナタという少女に対して、友情や親愛といった類いの感情を向けているのは間違いないのだろう。

「はあ、分かりました。お手伝い、してもいいですよ。ただ、どんな子がいいかだいたい目星が付いているのですが、さすがに私でも、多少時間は掛かるかもしれません」

世を捨てたかのような冷たい表情が綻ぶ。けれどそれ以上にヒナタの顔は輝いていた。

「あつ、ありがとうございます。私も一緒に探しますので、どうかよろしく願いますっ！」

* * *

ウイも「魔術師」と評されるだけあって、古書館を知り尽くし、キヴォトスで利用される図書分類法を完璧に習得し、平素は目録から目的の本を見つけることなど造作も無い。ただ、シスターフッドの典札担当者ですら頭を悩ます難解な問題ともなれば、いくつもの本棚を巡り、可能性のある書を片っ端から確認していく必要があった。

「こ、この子も違うんですか……うう、私にはあまりに内容が難しく何が何だか……お役に立てず申し訳ありません」

「いえ、だ、大丈夫です。探すのなら私だけでも十分ですから……」
お世辞にも会話を慣れているとは言い難い少女が、間違つたと気付

く頃には全て言い切っていた。

「そ、そう、ですよ……」

「あつ、その、悪い意味では無くてですね、こ、こういうのは、専門家の仕事と云いますか、だからヒナタさんが気を病む必要はないですし、その、重たい本を扱う時など、と、とても頼りになりますから」
消沈から一転し、自信と笑みの戻ったヒナタの表情に、ウイは胸をなで下ろした。

作業を始めてから十数分。未だ目的は達成できていないが、ヒナタに疲れた様子は見られない——変化があつたのは、ウイだけだ。
きゆる、ぐるぐる……

(また、お腹が鳴ってしまいました……はあ、ヒナタさんには聞こえていないといいのですが……)

か細い右手が下腹を撫でた——響く微かな鳴動は、ウイの大腸が再び蠕動を始めた証である。先刻は結局のところ便意を捕まえられなかったわけだが、糞詰まりの不快とは感覚を異にする「もやもや」はずっと残り続けていた。便秘のお腹はいつだって気まぐれだ。

(トイレに行ったら、今度こそ出せるでしょうか……でも)

排便を願うのであれば、微かな兆候も逃さないのが肝要である。便意と呼ぶにはまだ薄弱なこの兆しを、ウイは待ち望んでいたはずだ。今すぐに作業を中断し、またあのトイレで踏ん張らなければならぬはずだ。

(……さ、さすがに、うんこのために人を待たせるのは、気が引けますね。それに、あまり知られたくない、ことですし)

しかし、自身を頼り訪れた少女の、期待に満ちた表情が傍にある。

きつと今から排便に挑めば、そんな彼女をたつぷり十五分は待たせてしまおうだろう。

そもそもウイは社交性の乏しい少女である。『トイレに行ってきた』と、『大便をしてくる』と、『便秘をしているから時間が掛かる』と、あつげらんと言えりような性格では決してなかつた。誤魔化すことも、取り繕うことも、上手にできる自信は無い。

交流を深めつつあるヒナタといえど、自らの腹の中に詰まつた醜い茶色を覗いてほしくはなかつた。顔も名前も見知つた仲だからこそ、別の日もまた言葉を交わすかもしれないからこそ、隠したいと願つてしまふ。拒絶し遠ざげたくはないと思える数少ない相手だから、汚いところを晒すのは憚られる。踏み込むことも、踏み込まれることも慣れていないウイだから、大切な友人に排便をする姿を想われるのが嫌だつた。

ぐるる……ぐるるる……つ

ただ大便がしたいという事実は揺るがしやうがない。出せるかなど分らないが大便がしたい。尻を剥き踏ん張つて全部を吐き出したい。トイレに行きたい。欲求が、鈍い痛みが、言い出せない少女の腹の内ぐるぐる渦巻いている。

(うう……すぎすぎ痛む、お腹の張りが酷い、早くうんこを出したい)
なまじ大小腸が動き出してしまつたがために、硬質便が腸壁を力強く押しつけ、その度に襲う痛みが増していく。腹の奥に溜まつていたガスまでが駆け下り直腸を怒張させる。

ぎゅる、ごぼぼぼごぼぼ……!!

さながら詰まつた配管へ無理矢理に流体を流し込んだかのような、

濁つた音が少女の腹から響いた。

(つ、これは、あつ、まずい……つ！)

「そ、そのヒナタさん、少し離れたところにある子を見てくるので、ちよつとこのまま待つていてください」

刹那、自らの体に巻き起こる事態を悟つたウイは、その場を離れる旨を早口で告げると、足早にヒナタの視界から消えていく。

(つ、もう、我慢できませんっ！音が出ないように慎重に……っ！)

目指したのは本棚を挟んだ向こう側。そこへ少女は逃げ込んだ。

ぶすつ、ぶびび、ぶびつ、ぶすうううう……

すると懸命に閉ざした尻のすばまりが僅かに緩み、そこから膨大な熱量があふれ出す。緊張に張り詰めた顔面に安堵の色が映る。そして鼻を突く腐敗臭が立ち上る——つまり、下手な言い訳の果てにヒナタの前から逃げ出したのは、腹の内に溜まつたガスを吐き出すためだつた。自らの体内で高まり続ける強烈な圧力に屈服し、耐えられないことを悟り、ウイはこの場で擬似的な「排泄」行為に及ぶことを決意したのだ。

ぶすつ ぶすぶすつ ぶしゅううう……ぶすぶすぶすつ！

深部体温で暖められた気体が連続して下着へと吹き付けられ、尻たぶに高熱が拡がっていく。同時にウイの顔面も同じように熱を帯びる。重厚な書籍を収める本棚を挟むとはいえ、ヒナタからは数メートルと離れていないところで、大便そのものの悪臭をぶち撒けているのだ。恥ずべき行為であるという自覚は当然にあつて、その胸の内では赤い感情が燃えている。

(うあ……我慢してた分、お、おならが止まりませんっ、だめっ、少

しずつししないと、ヒナタさんに、気付かれてしまいます……っ！

ぶっ、ぶっ、ぶすっ……ぶりり　ぶすす　ぶす……っ！

しかし一度開かれてしまった肛門は閉ざせず、一度得た快楽を手放すことなどできない。ウイは書棚と書棚の間で縮こまり、打ち震えながら、小刻みな放屁を繰り返した。その結果、長いスカートの内側は純粋な糞詰まりガスで満たされ、また彼女の半径一メートル圏内も同様の状態にある。

ぶっ、ぶしゅっ、ぶすううううう……

一際長い放出を経て、少女は腸管の減圧行為を終えることができた。怪しまれる前に戻らねばならない。快の余韻に浸る間もなくウイはその場で振り向いた。

「ウイさん！　もしかしてこの子じゃないですかっ！」

……振り返ると同時だった。笑顔を浮かべたシスターが小走りで見付けて来たのは——残りの距離は五メートル。ウイの便秘ガス領域までなおも接近中。

「と、とまつ、止まって!!　こ、古書館で走る人がどこに居ますか!!」

古書館で叫ぶ人間もそう居ない。そもそも静粛と厳粛が求められる場所である。それなのに図書委員長にして古書館の魔術師たる古閑ウイは叫んだ。驚愕と狂乱で声の大きさをすら絞れない。

「ご、ごめんなさいっ！　わ、わたし、嬉しくてつい我を忘れてしまっ
て……っ！」

「はあ、はあ、はあ、待っていると云ったじゃないですか……べっ、別に何も変なことはいしませんよ……!?　た、ただ考え込んでいただけで……っ、だから、はあ、あまり慌てないでください」

あと数秒遅ければウイの大腸に満ちていたものを、目の前の少女に嗅がせるところだったのだ。言葉は落ち着いてきているが、未だ心臓が早鐘を打っていた。

「あと、その子は多分違います。タイトルの時点で分かりますから」
「そ、そうですか……残念です。でも、引き続き頑張りましょう！」
ガス抜きで僅かな「すつきり」を得たウイであったが、巨大な便塊はその腹に詰まってまま。そして腸管は蠕動を続けている。

* * *

ぐるぐるぐる……ぐるるるっ

（っ、またお腹が鳴つてますね。はあ、うんこを出せるかもしれないチャンスなのに……）

腹痛と再び溜まっていくガスの不快で集中力を欠き、更に十分近くが経った今も、ウイは目的の本は見つけられていなかった。堪えねばならない欲求によって肩が傾き、額にも汗が滲んでしまっている。

（うんこ、本格的にしたくなってきたかもしれません、ガスもまたほとんど溜まって……やっぱり、ヒナタさんに伝えた方が……っでも）
右手が下腹を撫でる。思うようにならない消化器官の詰まったその場所を睨み付ける。思考に割り込むその感覚は紛れもなく便宜そのものであって、トイレに籠もった先刻とは明確に質の異なる「うんこがしたい」。それが今のウイを襲うものだ。

「ウイさん？　少し顔色が悪いですが大丈夫ですか？　あの、もしかして、お疲れのところ無理をさせてしまいましたか？」

その美食は尊厳を賭してでも？

『フウカさんは食を探求する同志だと思っっていますわ』

勝手に同類にしないでほしいと強く思う。確かに、給食部の部長として、食という営みに対して人並み以上の執着を持っている自覚はあるけれども……不遜で、傲慢で、自由気ままな食道楽では私はない。何度も何度も無理矢理に連れられた挙げ句、彼女が率いる美食研究会の一員と勘違いされたこともあるが、風評被害もいいところだ。

『食のために日々全力を尽くすフウカさんのことは、尊敬しているのですよ』

そんな言葉を掛けられたのはいつの日だっただろうか。予算や時間や人手の都合で時に妥協をせざるを得ない給食は、ゲヘナ学園の中では必ずしも評判の良いものではなくて、皆好き勝手に批評する。無理筋な要望や苦情だって舞い込んでくる。だから、彼女の言葉に少しだけ、あくまでほんの少しだけ揺らいだのは否定しがたい。数少ない理解者が、悪名高い美食研究会の首魁であるなど、不運もいとところなのだが。

『フウカさんはとてもお優しいのですね』

食生活の乱れがちな先生に家庭料理を振る舞ったことを、黒館ハルナは風の噂で聞きつけたらしい。声色に滲む憧憬と羨望に、そのときの私は気付かないふりをしたはずだ。

ハルナという存在は捉えようなく、理解が及ぶはずもなく、けれどその言葉の数々を折りにつけて思い返してしまう私がいる。

午前八時三十分。私にとっては何の変哲も無い朝。つまり、ゲヘナ学園の食堂にて、後輩と共に約四千食に及ぶ給食の調理とその試食を終え、一息ついたところだ。

「フウカ先輩、今日の自家製リンゴジャムはとてもおいしかったです。今度改めて作り方を教えてください！」

「うん、もちろん。既製品もいいけど、予算のある日ぐらいいこういう工夫もいよいよね」

ちょっと個人的な料理を作ってしまうけれど、向上心は人一倍強い後輩——ジュリに対して微笑みかけた。ちょっとした一工夫が、食べられる人を楽しませる秘訣。大量調理が基本となる給食においてもそれは忘れないようにしているつもりだ。種々の制約はあれど、予算の範囲で少しでも良質な食材を調達し、最大限趣向を凝らして日々の調理に励むのが給食部長としての矜持だ。

「朝ごはんを抜いたり、簡単なもので済ませてしまう生徒さんも多いですが、こういう特別メニューの日は心なしか利用者が多い気がしますね」

一癖も二癖もあるゲヘナの生徒たちが素直に褒めてくれることは滅多に無いから、後輩の好意的な感想は励みになった。味の確認と次のフィードバックのために、わたしたち給食部員も必ずできあがった食事は食べるようにしている。

きゅるるる……くるるる……

そう、朝食を摂ってからしばらくの時間が経っていた。咀嚼され、胃

袋に投げられた自作の給食が朝一番の蠕動を引き起こす頃合いである。給食部として為すべきことを終え、身と心を落ち着かせた後には、決まってそんな「個人的な仕事」が待っていた。

「じゃあ、今日の昼と夜は残念だけど給食は無いから、また明日ね」
ジュリと別れ、向かう先は食堂の裏側。給食部員にしか原則立ち入りを許していない厨房の更にある調理員休憩所だ。今の私が欲しい場所は他にも多数ある。ただ、朝には今の私と全く同じ理由を抱えた生徒で混雑する場所も多いし、この学園の治安では順番争いで銃弾なり爆発物が飛ぶのも珍しくはない。だから私は、日夜丹精込めて生徒たちの食事を作る給食部の、ささやかな特権を享受させてもらおう。

ぐううう〜きゅるるるきゅるるるっ！

う、ちよつと待ってね私のおなか……！

いつも以上に張り切っている消化器官と平素よりも強いむずむずに押され、自然と歩調を速めてしまう。思い返せば昨日の昼の給食は根菜類と豆類を織り交ぜた食物繊維たっぷりメニューだった。無論、給食担当者としてその効用はよく理解しているし、今まさに身をもって理解を深めている真つ最中だ。

左手で逸る下腹部を撫でながら、私は赤色の標を掲げる引戸を開く。手を離せばひとりでに閉まってくれるオートクローザー付きの扉に任せて、そのまま内側へと進む。あまり多くの調理員が利用することを想定していないのか、ここは一人用の個室だ。食中毒対策として消毒と手洗いの設備はセンサーによる自動化が行われた充実したものだ、他と本質が変わることはない。そこには誰しにも必要なもの——洋式の便器が来る者を待ち受けていた。

さあ、今日も済ませてしまおう。食と対極を成し、しかし食べることと表裏一体となるその行為のために、捉えた白色に歩み寄る。限界までは遠いし冷静な思考は理解するが、私の体はお待ちかねの様子で感じるもやもやはお尻の穴にまで達していた。正直なところ、焦るほどではないにしろ胸の内は茶色の欲求でいっぱいだ。

トレードマークと自負するエプロンはフックに掛けておき、不浄の器に背を向け、そして何百何千と繰り返した所作を落ち着き払って実行する——フリルに飾られたスカートをたくし上げ、下着を膝まで降ろし、便座の上に腰を落とせば準備は完了だ。

「ふっ……んっ」

ぶっ、ぶううう……っ

強く息む必要なんてない。安楽の空間にただ一人のこの場所では、急ぐ必要なんてない。人として許される場所で尻を向けていれば、自然と欲求はむくむくと膨れ上がっていくのだから。それに応えるように、じつくりと腹圧を加えていけばいい。

時間に追われないことは幸福だ。もちろん、調理という行為は私を満たしてくれるけれど、そうは言っても給食作りは常に時間との闘いである。役割を果たし、胃を満たし、そして訪れる束の間の安息を楽しみにするのは、少々はしたないだろうか。

「う、んん……っ」

にちっ！ にちにち みちちちっ

僅かに間を置いた後、おなかとおしりを擦る心地良い刺激が駆け巡る。粘ついた音と共に何かが体の内からゆっくりと這い出てくる。暖かな快楽が全身に染み渡る——今日も気持ち良ゆうんちが出せる。

めちっ、みちみちみち むりりりにちち……っ！

いつもと変わらない快便。食物の成れの果てが圧縮され、ほどよい硬さを備えたうんちがするすると出てきてくれる。出来心で下を覗けば、そこには茶色の尻尾があった……いや、ツインテールの髪が絡まるほどの立派な角はあるけれど、本来私は尾を持たない。ただ太ましく伸びていく汚物がそう見えてしまっただけのこと。本物の尻尾を持つ子に怒られそうな例えだ。

さて、息むのを止めてしまい、今は私のお尻の穴に咥えられる形となった「それ」がぶら下がっている。自重と重力に負けていざれ断ち切られるものだけど、ここは——

「っ、んううんっ！」

ぶりぶりぶりぶりりみちちちっ!! どぼんっ!!

思い切りお腹に力を込めて、一気に出してしまるのが一番だ。

太いのを出して、快楽に類が緩み、全身が脱力するのが自分でも分かった。そうやって私は毎日心からの「スッキリ」を堪能している。まさかゲヘナ学園の給食を担う私が不摂生な食生活などできるはずもなく、栄養たっぷりのお食事を三食しっかり摂って、全てを正しく消化し、その絞りがかすをこうしてひり出すのだ。だから、私は詰まらせることも緩ませることも滅多にない。

生きるために食べる。そして食べればうんちが出る。それが自然の摂理であって、腐敗していく老廃物を溜め込むのは体にとって毒だ。良い食事の裏には気持ち良い排便があるはずだと常々思う。されど排泄は隠すべきもの。給食部員が大便の話で大っぴらに喧伝するのは食欲にも悪影響だろう……結局、私にできることは食物繊維を意識した

献立を考えることぐらいだ。

「う……んうう……っ！」

めちちにちにちちっ ぶりぶりりむりりっ！ ぼちゃんっ！

「はああ……」

今日もうんちがたくさん出る。息む度に、固形物が肛門を擦る度に、甘い電撃が全身を突き抜ける。緊張と弛緩を織り交ぜながら、私はその行為を繰り返していく。ああ、お尻からたっぷりと出しているものは、一昨日の給食が長い旅を終えたものだろうか。せつかく工夫を凝らして色とりどりに調理をしたものが、全て茶色の塊に変わり果てるのは虚しくもある。しかしそれでも、たとえ日常の食事として過ぎ去り記憶に残らないとしても、料理人が食べる人の笑顔を忘れていい理由にはならない。私はそう確信する。

きゆるるる……くるるる……

しばし物思いにふけていると、大腸が再びうねり始めた。まだお腹がむずむずする。便器の封水に、芯の詰まった至極健康的なうんちを三つも沈めたというのにまだ出てしまわない。

「ふんっ……んううう！」

少し強めに踏ん張る今の私は滑稽な顔を浮かべていることだろう。ぶううう……ぶりっ、むりゅむりゅにちにちちちちちちっ！ 下品な排泄の音も、不快な便臭も、穢らわしい汚物も、他者に晒すことなど絶対にあり得ないもの——そのはずだった。

「こちらですかフウカさん！ 探しましたわよ、今日はとても貴重な食材が……あっ」

な、なっ、なんでハルナがここに、いきなりはいつものことだけど

なんでトイレにかわたくしいまうんちをぜんぶ、み、みられて……っ!!
「きゃあああああっ!!」

他でもない私自身の、恥と驚愕を乗せた叫びが響き渡る。うんち中の情け無い表情も、まさにお尻の穴から伸びていく真っ只中のうんちそのものも全部ハルナの瞳の中に焼き付けられたことだろう。

「ご、ごめんなさいフウカさん、まさか、その、している最中とは……っ!!」

「いいから早く閉めてよ! 見ないでよっ!!」

——まくし立て、両手で秘密をなんとか覆い隠しながら、私は鍵を閉め忘れてしまったことを強く、強く後悔した。

* * *

「……はあ、やっぱり待ってたのね。それで、勝手にトイレの扉を開けたことについて何か言い訳はあるの?」

先程の珍事から間を空けて、恥辱と怒りで真っ赤になった顔を冷ますのに数分と、尻穴を拭き取るのにまた数分を掛けてトイレを出た私は、入口のすぐ傍で待ち構えていたハルナと対面する。

連れ回される、振り回されることには慣れたけれど……いや慣らされるのも大問題だけど、排便を覗かれるのは当然初めてのこと。その瞬間のこと、全てを目撃されたことを思い返すだけでまた顔が熱くなる。だから、困惑気味なハルナの瞳をじりと睨んで問い詰めてやっ

た。
「それは……その、片っ端から扉を開けていまして、標識を見ていな

かったので、まさかここがトイレだなんて思いませんでしたから……」
申し訳なさげで困り顔を浮かべるハルナは貴重なものだ。いつものごとく聞き直るものかと思っていたが拍子抜けである。少し驚きながらも私は続けた。

「それで、今日は一体何をしに来たの? 一体どこに連れて行くつもり? というか、他の皆はどうしたの?」

もちろん、約束なんてしている訳がない。傍若無人を擬人化したようなハルナの訪問はいつだって突然だ。突然美食研究会の皆で現れたと思ったら、問答無用で手足を縛られ、そのままどこも知れぬ場所まで連れ去られる……そんな異常事態を何度経験しただろうか。

「ええ、今日はずっと待ち望んでいた食材が手に入ったので、ぜひフウカさんに調理をしてみたいとお持ちしました。本当なら美食研究会の四人が揃って頂きたかったです、生憎皆さん今日は不在のようでした……足の速い食材ですから仕方ありません」

小型のクーラーボックスを大事そうに抱えたハルナが、目を輝かせながら語る。その相貌は悔しいけれど眉目秀麗と形容するほかない。女性的な曲線に恵まれた肢体も、射貫くような力強い瞳も、輝き光を放つ銀色の髪もどうしようもなく綺麗だ。純白のブラウスと黒を基調とするダブルボタンのスカート、艶めかしく下肢を包むストッキング、肩に掛けられた外套……全てが彼女の身と調和し、とても様になっていく。気を抜くと散々迷惑を掛けられている私ですら目を奪わされてしまうほど。それでいて、キヴォオトスの中でも悪名高いテロリストにして、倫理と常識の欠落した食道楽で、私の天敵なのだから本当に、心の底から質が悪いことだと思う。

「それで、勿体ぶらずに教えてくれればいいんじゃないの？」

「ええ、ご覧ください。知人ぞ知る、ウミクダシですわ」

見れば辛うじてクローロボックスに収まる大きさの生魚が、氷水の
中に浸かっていた。

「えっと、今度はどこの水族館から盗んできたの？」

「うふふつ、今回はツテを辿って入手したものですからご安心ください
い。これなら、誰かに追われること心配ありませんよ」

以前、他校の水族館から魚を強奪し、紆余曲折あつて給食部の車が
水底に沈む結果となったことを思い返す。真つ当な方法で入手したも
のならば私が調理してもいい。いや、そもそも調理してやる義理は欠
片もないのだけど、そう言っても聞かないし……

「私、一通り捌くことはできるけど、別に専門家ではないし、ハルナ
はちゃんとした寿司職人とかに頼まなくていいの？」

半ば観念しながらも、ふとした疑問に触れてみる。自意識過剰かも
しれないが、ハルナは私のことを妙に気に入っているようだから。

「ええ、信頼していますから。いくら腕が良くても熱意が無ければ良
い料理はできません。まさかこれだけの食材を前にして、フウカさん
が手を抜くなどあり得ないでしょう？」

ぬけぬけと口にするハルナを前にして、思わずため息が漏れる。い
つだって私の都合なんて考えないハルナに対してもそうだが、結局流
されてしまう自分自身にも全く愛想が尽きる。

「あらフウカさん？ 今日日は縛ったりしませんよ。先程は非礼を働い
てしまいましたし、担いでいくのには人数が足りません」

なっ、あつ……な、なんてことだ。私は手早く拘束されてしまおう

と、無意識のうちに両手を差し出していただなんて。それをハルナ本
人に指摘されるまで気が付かないだなんて……っ！

「っ、いつも無理矢理縛って拉致するのが悪いんでしょ！」

「では今日は付いて来てくれないんですか？」

上目遣いの視線が私を捉えている／なぜだか私はそこから視線を
逸らせないでいる。

「……はあああ、まあ、今日は厨房の修理で給食が無い日だし、特段
予定も無いし、それにウミクダシは気になるし、特別だからね」

結局私は今日もこの女に流される。このふてぶてしく笑みを浮かべ
るこの女に。

「ありがとうございます、フウカさん。それでは参りましょう」

* * *

私は美食研究会が保有するゲヘナ自治区郊外のセーフハウスに招
かれていた。そこには小さいながらもきちんとした厨房がある。温度
計付き大型冷蔵庫、二槽シンクに高火力の業務用ガスコンロなど家庭
料理どころか小規模な食堂さえ開けるほどの設備をよくも揃えたも
のだ。

「それで、この魚のことはちゃんと知った上で、お刺身で食べたいと
言っているのよね」

「ええ、それが一番かと。真の美食を追及するためには、少々危険
も承知のことです」

そんな厨房で、まな板の上にウミクダシが載せられている。希少な

高級食材ゆえにまさか給食で調理するはずもないが、とはいえ料理人の端くれとしてこれがどんなものかは理解している。端的に言えばこれは毒魚の一種だ。

「言っておくけど、料理人としては許容できないし、私が作ったもので食中毒なんて絶対に起こさせない。卓上コンロもあるんだから、食べる前に少しでも炙っておくべきよ」

外敵から身を守るためにウロコに備えた毒が、時折身の表面にまで浸透しているため、この魚の生食は原則禁忌である。毒の強さは、まさか私たちのヘイローを壊すには程遠いものだが、とはいえ中れば三日三晩は熾烈な消化器症状に苦しむとの噂だ。幸い熱には極めて弱いものなので、最低限炙り刺身として食べるべきだろう。

「しかし、せっかくの新鮮なお魚を炙りにしてしまうのは美食家としては間違っていないでしょうか。身命を賭してでも、最高の形で頂くのが正解ですわ」

「何言ってるのよハルナ。食べた人を不幸にするかもしれない料理なんて私は認められないから。もちろん、確率の問題でもあるけれど……それでも、この魚を生で食べるのはリスクが高すぎる」

向こう見ずなハルナに対し、私は身を乗り出して反駁した。こちらとしても料理人としての矜持があるのだ。正直なところ自分の想像以上に強い声が出ていたし、ハルナも意外そうな顔をしている。

「言うことを聞かないのなら帰るわよ」

「なっ……し、仕方ありませんね。ええ、どんな形であっても、それぞれの良さがありますし、これもまた一つの出会い。制約の中での探求もまた美食の道には必要なことですよ」

いつも振り回されてばかりだけど、今まさにハルナの胃袋を握り、ウミクダシ料理の行く末を握るのはこの私だ。

「……やはりフウカさんも、私と同じ食の求道者です。信じる道を決して譲らないところ、そのひたむきさ。私は好きですよ」

……無自覚に率直に好意を伝えてしまうところは本当に直した方がいいと思う。そのくせ自分が迫られると簡単にたじろぐせに。深く踏み込む勇氣は無いくせに。

「……ハルナと一緒にされるのは気に入らないけど、でも、せっかくの食材が悪くなる前に調理はするから」

毒魚という点においては特殊な魚であって、特に毒を持つ体表面の処理には細心の注意を払う必要があるが、捌き方は他と変わるものではない。丁寧にウロコを落とし、頭を断ち切り、内臓を取り出し、おろしていく。あとは一口大に切って皿に並べればウミクダシのお造りの完成だ。希少な食材だからこそ余すところなく食すべく、肝はよく加熱して肝和えにしたし、あら汁も作った。

「完璧ですわフウカさん。さて。それでは早速、頂きます」

目をつむり、両手を合わせ丁寧に食材への感謝を述べるハルナの姿は、言いたくはないがとても絵になった。穏やかに頬を綻ばせ、丁寧に箸を動かす様もどこか気品を感じられる。常にこうならばいいのだが……

「って、ちゃんと炙りなさいよ。毒を消すにはもう少し時間を掛けたいとだめですよ」

「ふふ、ご心配いただきありがとうございます。ですが、炙り加減に

よって移ろう千変万化の味を楽しむのもまた一興ですから」

「まあ表面に火を通せば大丈夫とは聞くけど……でも気をつけなさいよね」

そう言いながら私も調理の成果を口に運んでいく。無論、丹念に炙って毒素を熱分解してからだ。想像以上に質の良い脂がたっぷり乗っており、正直に言っても美味しい魚だと思う。こればかりはハルナに感謝しよう。

「ご馳走様でした。フウカさん、とても素晴らしかったですよ。炙り刺身もそうですが、肝和えやあら汁も最高の出来映えです。脂が多いことを理解しての絶妙な味の調整やお味噌の塩梅が光るものでした。希少ゆえに明確なレシビの存在する食材ではないというのに、さすがですわ」

二人きりで全てを平らげ終えると、ハルナはいつもの穏やかな笑みを浮かべて褒め称えてきた。美食家というのは決して誇張などでなく、なんだかんだ言っても舌の繊細さにかけてはハルナは抜群に優れている。料理人の小さな一工夫も、反対に些細な手抜きも見抜いてくるのだ。私は様々な制約の中で妥協をすることはあれど、その中で真正しく全力を尽くしているつもりだけど、横着な誰かの邪な考えが料理に混入すれば、この女は容赦なくその店を吹き飛ばすだろう。

「褒めても何も出ないわよ。今回だけの特別だから」

そんな気難し過ぎる人間が絶賛するのだから、少しばかりは嬉しい、ような……いや、何で私がハルナに絆されているのだろう。いつだって身勝手なこんな奴に……

「……それに、そんなに感謝してくれるんだつたら、今日の買い出しぐらい付いてきてよね。いつもは縛られた挙げ句の不可抗力だけど、今日は私の方から作ってあげたんだから、お返しに給食部の手伝いぐらいするでしょ？」

「えっ……あつ、えつと……その、私とフウカさんが一緒に、ですか？」
余裕ぶつた声と表情は消え失せ、困惑と混乱が伝わるような口ぶり
でハルナが問い返してくる。

「うん、食材はトラックで運んでもらうけど、ちょっとした調味料を買ったりだとか、壊れた調理用具の買い換えとかをしてみると両手が塞がるでしょ。それに、誰かさんのせいでは今は車が無いのよね」

ジュリには今日はゆっくり休めと言ってある。だから人手があるだけでも助かるのは事実だ。それに、今の私は高級食材のおかげで少しばかり気分が良かった。だから、ほんの少しばかり心を許してしまっただろう。それはあくまで、美味しい食事を楽しめたし、料理人として貴重な体験ができたからだ。決して褒められたのが嬉しいだとか、そんな感情であるはずがない。あり得ない。

「二人だけで買い物ですか……それは、その、私は大丈夫ですが、いいのでしょうか？」

疑問を持つのはむしろ私の方だ。なんでハルナなんかと……いや、口に出してしまっただけ、もう止まるつもりはないのだけだ。

「何度私のことを攫っておいて、今更何を言っているのよ……」

* * *

気まぐれなお腹は理解不能。
ある生徒は糞詰まりに苦しみ、ある
生徒はピーピーに腹を下す。
その果てに理解を得たこととは？

「ブルーアーカイブ」に登場する生徒さんがお便秘・腹下しに苦しむ様と秘められるべき排泄行為、そして暖かな繋がりをテーマとした排泄系小説3編（書き下ろし2編・公開済み1編）を収録しました。

登場キャラクター
（排泄シーンあり）

- ・ウイ
- ・ヒナタ
- ・ハルカ
- ・ハルナ
- ・フウカ

発行サークル
少女排泄表現開発事業団